
教えて、玲奈せんせい！

蒼崎れい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

教えて、玲奈せんせい！

【Nコード】

N0691S

【作者名】

蒼崎れい

【あらすじ】

これはどつさり投稿魔（自称）事、蒼崎れいの扱っている（未出も含む）魔法・魔術の形態を台本形式で玲奈先生が分かりやすくコミカルに教えてくれると言う、ただそれだけのコーナー（？）である。過度な期待はしないでください。また、長時間連続して見たりせず、こまめに休憩を取りやがってください。気分更新です

H R 始める前にとりあえず（前書き）

まあ、ここわりとどうでもいいキャラ紹介がだらだら続いてるだけですから。

HR 始める前にとりあえず

> i 3 0 6 0 3 — 2 1 0 1 <

登場人物紹介

草壁玲奈

ここには投稿していないわたくしこと蒼崎れいの処女作に登場するキャラ。

見た目

身長一五六センチ、目鼻立ちのくつちりした顔で、切れ長の目が特徴。腰まである特殊なポニーテールが目印。黒髪黒目で和装がよく似合う。

性格

DSで傲岸不遜で毒舌で負けず嫌いで男勝りで隠れDM。そしてシスコン。好きな男性のタイプは自分より強い人。好きな女性のタイプは……、待って！ 言わないからその刀しまってください！

基本スペック及び、簡単な紹介

HP：紙

MP：測定不能

AT：測定不能

DF：紙

SP：測定不能

以上のような極端なスペックを誇り、敵攻撃全回避、攻撃時敵装甲無視のスキルをデフォルトで搭載している元無敵少女。なぜ元少女なのかと言うと、処女作時は十四歳であったが、現在の時系列では二〇歳に達しているため。魔術師の世界では最強と言っても過言でないほどの実力を持ち、現在は小規模な魔術師結社“ネームレス”の首領を務める。

二つ名

- ・最凶最悪の陰陽師
- ・戦巫女
- ・生き鬼神
- ・現人神…… e t c

作者

わたくしめ蒼崎れいの事です。

見たい目

禁則事項です（笑顔）

性格

けっこう賑やかなのが好き、でもさらす相手は一桁。ネガティブ思考に陥りがち。最近はネタを思いついても書く時間がないので困っている。

基本スペック及び、簡単な紹介

身長：一六七センチ

体重：五〇キロ

座高：九〇センチとちょっと（足短……）

体脂肪率：なんとか一桁

遅筆で一話書くのに一ヶ月近くかかる。特に描写に関しては綿密で（自称）、戦闘シーンになるとすごい（これも自称）。

二つ名

- ・どっさり投稿魔（自称）
- ・戦闘狂（知り合いの某毎日投稿魔さんよりいただいた）

鷹司奈々

現在構想中の小説に出てくるキャラ。陰陽科の学生で陰陽師見習い。

見た目

身長一五〇、茶髪でサイドポニー。可愛い系の顔の作り。グラマーとスレンダーの間くらい。手頃なサイズの胸を、いつも女友達に弄ばれていたたり。

性格

天然でトロイところがある。基本的には誰にでも優しく、温厚で賑やかな性格。ただし、妹に対してだけは威厳のある姉を貫きたい模様。

基本スペック及び、簡単な紹介

天 然：

ツ ン：

ク ール：

デ レ：

ド ジ：

とにかく存在そのものが天然とまで言われるような少女。成績はあ

まり良い方ではないが、感覚だけで他人の術を真似るある意味とんでもない特技を持つ。ただ『ミニコピはできるが譜面が読めない』みたいな感じで、魔導書を読んでも全く理解できない。

二つ名

・性格が天然

玲奈「ちよつと、そのへボ作者」

作者「玲奈ちゃん、作者捕まえて『へボ』とか言わないで欲しいんだけど（汗）」

玲奈「なんか私の紹介が酷い気がするんだけど、あれは意図的にやってるのかしら？」

作者「酷いつて？」

玲奈「元少女、とか」

作者「（汗がたらだら）」

奈々「そうですよ作者さん。玲奈さんだって取りたくて歳をとったわけじゃないんですから」

玲奈「（ピキピキ、怒）。……………奈々」

奈々「は、はい！」

玲奈「今度余計な事言ったら、オシオキよ。それも、特別痛いやつ」
奈々「え？　なんでですか！　私、なにか気に障るような事言いましたか！」

玲奈「いいから、あんたは少し黙ってないさい（鋭い眼光＋怖い顔）」

奈々「は、ひゃい（怖）」

作者「まあこんな感じでグダグダお送りしますので。骨休め程度に
どうぞ。今回、描写とか九九%ないです。（笑）とか（汗）とか、
この程度のレベルでお届けします」

一時限目 力の分類

玲奈「んじゃ、手始めに魔力について教えていくわね」

奈々「はい、お願いします！ 玲奈さん！」

玲奈「奈々、ここでは一応“先生”と呼びなさい」

奈々「え、でも玲奈さん教員免許持ってないん……」

玲奈「いいから（俗に言う怖い笑顔）」

奈々「わわわわ、分かりましたです！ はい！ 先生！」

玲奈「それじゃ、始めるわよ。まず奈々に質問。あんたの使っている力はなに？」

奈々「え？ 鷹司流陰陽術ですけど？」

玲奈「そっちじゃなくて、あるでしょ。魔力と似たような名前の奴」

奈々「似たような………あ！ 霊力ですか」

玲奈「そうそれ。じゃ、この二つの違いについて説明できる？」

奈々「えっと、えっとですね、待ってください。そんないきなり言われてもですね、普段からそんなこと考えた事も無かったですから、時間が……」

玲奈「遅い」

奈々「え！？ 早すぎますよ！」

玲奈「んじゃ、へボ作者。説明よろしく」

奈々「つて、私の事は完全に無視なんですか、先生！」

作者「もういいよ、へボ作者で。君のその性格考えたのは自分なんだし、自業自得だね」

奈々「作者さん、説明をお願いします」

作者「それじゃ、説明するね。結果だけ言うと、その二つは同じものだよ」

奈々「……なんかその答えずるくないですか」

作者「話を最後まで聞きなさい。この違いは、洋の東西で呼び方が変わるって事。基本的に“魔術師”って単語は西洋の扱ってる“魔

術”って言葉から来てるんだから。まあ、最近では君ら、二人とも魔術師だけど、“陰陽師”って呼び方が正式だろ。神道だったら神主さんや巫女さんだし、道術だったら仙人になったり。それに、アジア圏って発言でいいのかな、妖力っていう種類の力もあるだろ」

奈々「あ、そう言えば……」

作者「日本では、人間の使う不思議な力を霊力。人間に害をなす存在、例えば妖怪とかの使う力を妖力って呼んでいた。それがヨーロッパ圏に行くと、二つとも魔力って呼ばれてるんだと思うよ」

玲奈「はいはい、解説ありがとうね。あと向こうではキリスト教の関係から、神とか悪魔とかって考えがあってね。主、つまりはキリスト教の最高神の加護以外の力は、全て悪魔の力を以って成す術、すなわち魔術って呼ばれてたのもあるわ。つまり、魔力とは悪魔の力、もしくは神以外の力を指すの。私達東洋人から見れば後者の方つまり『神以外の力』がしっくりくるんだけど、向こうではまだ前者の考え、つまり『悪魔の力』って人も多くてね。宗教系の魔術師達の間ではしよっちゅう話題になってるわ。聖書や伝承にまつわる術式や、天使の力を扱った術式使う人もいるからね」

奈々「なんか後半話が飛躍しすぎてよく分かんないですけど、全部にたようなものだって事は分かりました」

作者「まあ、そうだね。分かってもらえてよかった」

玲奈「ちなみに、他にも神通力とか、神気とか、気とか、そういうのもあるわね」

奈々「ほえー、玲奈さん詳しいですね」

玲奈「伊達に世界中飛び回ってないわよ。それと、いつ誰が、私の事を名前で呼んでいいって言った？」

奈々「す、すみません！」

魔力・霊力・妖力を同列の力として扱うか、全く別の物として扱うかは書く作者さんの自由です。これはあくまで、作者自身（蒼崎

れい)の考えです。

二時限目 魔力ってどうやってできるの？

玲奈「奈々、あんたも魔術師の端くれなら、分かるわよね」

奈々「……………」

玲奈「……奈々」

奈々「（滝のような汗が）」

玲奈「あんた、実家でなにを勉強してきたの（呆）」

奈々「えっと、できるものはできるんですよ（引きつった笑顔）」

玲奈「あんたに聞いた私がバカだった。ごめんね、そんなにバカだとは思ってなかったから」

奈々「せ、先生ひどいです（泣）」

玲奈「へボ作者は、魔術師じゃないからね」

作者「はい、ただのお花畑です」

玲奈「しゃーない。私が説明するから、よく聞いとくのよ。特にその見習いの陰陽師志望」

奈々「し、志望じゃなくて、本当になるんですってば！」

玲奈「まず大きく分類して、魔力の生成過程は二種類存在するわ」

奈々「む、無視ですか……（哀）」

玲奈「それじゃあ、順番に説明していくから、よく聞いときなさいよ」

奈々「はーい！」

作者「まあ、考えたのは私なんだけどね……（小さな声で）」

その巻、直接生成型

玲奈「まず、魔力そのものを生み出しているタイプね。便宜上、これを“直接生成型”と呼ぶ事にするわ」

奈々「ちよくせつせいせいगत？ えっと、どう言う事ですか？」

作者「この手法はね、なにもない所から魔力を生み出すから、一種の永久機関みたいなものと考えてもいいかな」

奈々「えいきゆうきかん？」

玲奈「へボ作者の例えが悪い」

作者「す、すみません」

玲奈「つまり、生きている限り、魔力を作り出す事ができるって事」
奈々「あれ、でも私そういうの見たことないですよ？」

玲奈「そりゃそうでしょ。そのへボ作者がそういうの出さないんだから」

作者「出てたでしょ！ 処女作で！」

玲奈「そういう口は、ここにその処女作とやらを連載してから言え」
作者「すみません、未完のまま放置してます。『Magus Magus』マクス・マグヌス』終わったら、改定して連載させますから。何年後になるか分かりませんが」

玲奈「いつペン死んでこい」

奈々「せ、先生、その、あまりいじめちゃだめですよ！」

玲奈「分かってる、からかっただけよ。実はこの“直接生産”って、すごく大きなアドバンテージなんだけど、まあそれはまた後で説明するわ」

奈々「か、からかったって……。まあいいや、えっと、魔力そのものを体内で作れるとなにかいい事があるんですか？」

玲奈「まあ、次のお楽しみって事で」

奈々「……はい」

玲奈「まったく、へボ作者のせいで無駄にページ使っちゃったじゃない」

作者「すみません。今後、こういう内輪ネタは自重します」

玲奈「ま、生成過程を述べただけだから、これ以上は特に言うこと

ないんだけどね。じゃ、次行くわよ」

奈々「は、はい。お願いします！」

作者「だから、考えたの私だからね（くどいようですが、すごく小さな声で）」

その式、間接生成型

奈々「えっと、かんせつせいせいがた、ですか？」

玲奈「奈々、漢字くらいスラスラ読めるようになりなさい。日本人でしょ、あんた」

奈々「は、はい（しよんぼり）」

作者「まあ、確かにこれくらいは読めるようにならないとね」

奈々「しゅみましえん。それで、間接生成型っていうのは、さっきの直接生成型となにが違うんですか？」

玲奈「“間接生成型”って名前も、まあ便宜上の名称なんだけどね。これは、空間に含まれる魔力の元となる素子を集め、それを体内で変換する事で魔力を得るタイプよ。私たち人間は、このタイプに属しているわ。多くの人は、魔力を生成するっていう感覚が分からないからできないんだけど、人間は基本的に魔術を使える肉体構造になってるわ」

作者「だれか、私にも作り方教えて」

玲奈「お花畑脳のヘボ作者には無理。そもそも、こっち側の世界に首突っ込もうなんて、一億年早いわ」

奈々「先生、一億年経ったら、人類なんて滅んでると思うんですけど」

玲奈「いいのよ、そんな事も分からないような人間なんだから」

作者「玲奈先生、一億年って、何回輪廻転生すればいいんでしょうか？」

玲奈「こういう風にバカな質問しかできないから、放っておきなさい」

作者「そういえば、これってかの有名な某魔砲少女作品と設定が…」

…（玲奈の日本刀が首筋に）」

玲奈「そういう、著作権的に危ない事は言わない。ワカッタ？」

作者「しゅ、しゅみましえん」

玲奈「分かればよろしい。まあ、生成過程についてはこの辺にしようか」

その参、両者の共通点

玲奈「それじゃ、まずこの二つの共通点からね」

奈々「お願いします」

玲奈「まず分かりやすく、ゲームみたいな感じで説明するわよ。ヘボ作者、お願い」

作者「はいはい。えっと、ファンタジー系のゲームには“MP”みたいな項目があると思うけど、分かる？」

奈々「はい。けっこうゲームしますから。でもあれですよ、復活系呪文。あれだけはいただけませんね。死者蘇生なんて、禁術もいいとこですよ。しかも、ゲームで重要キャラが死んでも、それで生き返るじゃないですか」

玲奈「……………奈々」

奈々「あ、すいません」

作者「それじゃ続けるよ。MPっていうのは、上限が決まってるよね。この上限が、俗に言う“最大魔力容量”ってやつ。これは生まれながらに決まってるもので、訓練によって伸ばす事はできない。

魔術師としての、先天的な資質と言ってもいい」

玲奈「まあ、鷹司家はかなりの名家だから、あんたの最大魔力容量はなかなかのものよ」

奈々「え？ そうなんですか？」

玲奈「魔術師の家系が、魔術に秀でてるのはこの“先天的な資質”を引き継いでるからよ。そして、名家ほどその資質は高い物になる」

奈々「へえ〜。じゃあ、先生はどうなんですか？」

玲奈「聞きたい？（なぜか笑顔が怖い）」

奈々「いえ、いいです」

玲奈「それじゃ、次は生成効率についてね」

奈々「せ、せいせいこうりつ？」

作者「つまり、“単位時間当たり、どれだけの魔力が作れるか”って事。“魔力の出力”って言うってもいいかな」

玲奈「この生成効率が高いほど、一定時間により多くの魔力が作り出せるの」

奈々「ふむふむ、なるほど。先生、質問！」

玲奈「はい、奈々」

奈々「その、生成効率って、鍛える事はできるんですか？」

玲奈「いい質問ね。そう、この生成効率は、後天的に鍛えることは可能よ。つまり、知識のない人間でも、学べば最小規模の魔術を行使する事は可能ってのは、これがあるから。その代わり、最大魔力容量が低いから、大規模な魔術の行使はできないの」

作者「分かりやすく言うと、最大魔力容量はコップの大きさで、生成効率＝魔力出力は水道水の出る量って事かな。コップが大きければたくさん水が入るし、小さければあまり水は入らない。これが容量。ちよろちよろ出したり、ドバーっと出したりするのが、出力分かった？」

奈々「はい、分かりました」

玲奈「それじゃ、次のステップ行くわよ」

その肆、両者の相違点

玲奈「それじゃ、最後は二つのタイプの違いについて」

奈々「えっと、たしか魔力を直接作れるか、材料があるか、ですよ
ね」

玲奈「そうそう、よく覚えてたわね。もう忘れてるかと思った」

奈々「ひ、ひどいです（グズン）」

作者「直接生成型と間接生成型ね」

玲奈「じゃあ奈々、私が直接生成型の時に言ってた事、覚えてる？」

奈々「えっと、アドバンス……」

作者「アドバンテージね」

玲奈「……奈々、アドバンテージの意味は分かるわよね」

奈々「はい、でも……。違いがよく分かりません」

玲奈「じゃあ質問。もし魔力の材料がなかったら、二つのタイプが
戦ったらどっちが強い？」

奈々「それは、直接生産型ですよね」

玲奈「なんで？」

奈々「それは……。ああ、そう言う事ですか」

玲奈「そう。直接生成型は、生きてさえいれば魔力を作り出せるの
に対して、間接生成型は、魔力の元となるものがないと、魔力を作
り出せないわ。これが、直接生成型の圧倒的なアドバンテージよ」

奈々「なるほどお。じゃあ、もしそんな人にあったら、どうするん
ですか？」

玲奈「まあ、私達も魔力作れるなら大丈夫よ。作れないときは、運
がなかったと思って諦めるのね」

奈々「え、なんかひどいですね、それ」

玲奈「世間なんてそんなもんよ。さて、今日の授業はこんなものね」
奈々「ありがとうございます」
作者「疲れた」

これはあくまで、作者自身（蒼崎れい）の個人的な考えです。他の作者様の考えを否定しているわけではありません。

三時限目 魔法陣について

玲奈「じゃ、今回は今までより、ちょっと実践的な内容に入るわよ」
奈々「はい」

作者「いや、まだそんな実践的でもない気が……」

玲奈「んなわけで、魔法陣について勉強します」

奈々「おー、なんか前より本格的」

作者「……無視ですか orz」

玲奈「んじゃ、奈々、魔法陣を構成している“もの”ってなにがある？」

奈々「えっと、円とか、文字とかですか？」

玲奈「そうそう、そんな感じ。まあ、日本語で書かれた魔法陣は見たことないわね。基本的に、インド・ヨーロッパ語族の文字で書かれているのが多いわ。特にラテン語や、そいつの語源が多くあるギリシャ語なんかね」

奈々「でも、なんでラテン語とギリシャ語？」

玲奈「ローマ帝国が、その二つを公用語にしたからみたいね。最大時はとんでもない国土になってたし、それにキリスト教の普及に伴って、広がって行ったのかも。今でも、ヴァチカン、公用語がラテン語みたいだし」

奈々「へえー。確か、すごく古くておっきい国ですよね。なるほどお」

玲奈「まあ、私は言語体系の発展や拡散については、そんな詳しくないから、間違ってるかもしれないけど」

奈々「あら……」

玲奈「他にも円とか言ってたけど、あれも意味はあるから」

奈々「えっと………どんな意味が？」

玲奈「あんた、本当に魔術師としての自覚あるの？」

奈々「……あ、ありますよ！」

玲奈「ま、今の間は気にしないとして。あれは“世界”を“区切る”ための境界線の役割が強いわ」

奈々「境界線。つまり、線の内側は、外側と違うって事ですか？」

玲奈「正確には、内側を“違う世界”へと強引に“改変”するのよ」
奈々「????」

玲奈「魔術つてのは、言っちゃえば“世界の法則を力任せにねじ曲げる”術なの。場所を最小限に区切らないと、ばかみたいな大規模になる上に、魔力が足りなくなっちゃうでしょ」

奈々「あ、そう言う意味ですか」

玲奈「まあ、形は関係ないけどね。三角だろうが、四角だろうが、バカな話百角形だろうと、世界を区切るって意味は一緒って事。まあ、円は私達魔術師にとつては“宇宙”、即ち“無限”を内包している図形だから、扱われる機会が多いわね」

奈々「先生、今日は説明長くて疲れます」

玲奈「うるさい見習い。せっかく教えてやってんだから、聞きなさい。それに、円についての説明は終わったから」

奈々「分かりました。でも、それだけでもなんかすごい量……」

玲奈「あと、改変された法則は、魔法陣を出た途端に元に戻ろうとする性質もあるの。じゃ次ね。ちよつと前の話を思い出してみ」

奈々「えつと、インド・ヨーロッパ語族あたりですか？」

玲奈「そう。魔法陣に書かれている字ね。でも字だけじゃ、意味が分からないわよね」

奈々「まあ、そうですね。当たり前ですけど」

玲奈「あれはね、“こんな現象を起こさせたい”って事を、書き記しているのよ」

奈々「え！？　そうだったんですか！！　私には翻訳不能の怪文書にしか……」

玲奈「あんた、もっと外国語を学ぼうね。話を戻すけど、単純なものほど短く、オブションが増えれば増えるほど、長く、つまり術として難しくなるの」

奈々「確かに、魔法陣が複雑になるほど、術は難しくなりますよね。分かります」

玲奈「それに、術の規模が大きくなるほど、文章も長くなるし、それに伴って魔法陣も大きくなるわ。あと、普通、単純な術の魔法陣は小さいけど、それも規模を大きくすれば、そのまま大きくなるの」
奈々「つまり、手っ取り早く効果を上げるには、魔法陣を大きくすればいいんだ」

玲奈「まあ、極論すればそう言う事。まあ、プログラムみたく、高速処理みたいな抜け道とかもあるから、小さくてもとんでもない威力の物もあるわよ。あと、個人によってはそれも自在に調整できるし」

奈々「ふむふむ、参考になりました」

玲奈「あ、あと最後に」

奈々「まだあつたんですか!？」

玲奈「魔法陣の起動についてよ。これにも二つくらいパターンがあるのよ」

奈々「あ、そっか。まだそれがありましたね」

玲奈「一つは、起動キーを言う事で完成するタイプ」

奈々「詠唱が必要なやつですか?」

玲奈「そうそう。早い話、砲撃系の魔法陣なら『撃て』って言うだけのタイプもあるわ。あとは、魔法陣に刻まれてない文章を、読み上げる事で完成するって感じかな」

奈々「ははあ。それで、もう一つは?」

玲奈「条件を揃えた瞬間に発動するものよ。簡単に言えば、魔法陣に起動キーを組み込んでるの。トラップとして、あらかじめ設置しておくタイプが主な使用方法ね」

奈々「強い敵を相手にするのに使えそう……」

玲奈「それは、そうやって使うもんよ。そうそう、これはあまり見かけないんだけど、世の中には“立体魔法陣”って言う、三次元空間に描く魔法陣もあるのよ。滅茶苦茶難しい魔法陣なんだけど」

奈々「頭痛くなりそうな魔法陣ですね。すごいのは分かりました（汗）」

玲奈「あと、魔法陣に十分な魔力を送るのも忘れないように。んじや、今回はこれで終わりよ。それじゃあ」

奈々「はい、ありがとうございます」

これはあくまで、作者（蒼崎れい）独自の考えであります。調べ不足の箇所もある可能性もありますので、全て正しいとは限りません

四時限目 呪文・詠唱

玲奈「じゃあ今回は、いよいよ呪文・詠唱について勉強します」

奈々「ついに、ついにですか！」

作者「魔法・魔術と言えば、やっぱここは外せない」

玲奈「へボ作者の認識はともかく、確かに外せないわね。ほぼ全ての魔術体系において、使われている技法と言って良いわ」

作者「意味があるのかすら分からない呪文に、厨二全開の痛々しい単語や言い文句。格好いいじゃないか……」

奈々「……………（ゾワゾワ）」

玲奈「奈々、私達の場合、職業上仕方ないから諦めなさい」

奈々「……………（しゅん）」

玲奈「それじゃ、講義を始めるから、しっかり聞きなさいよ」

奈々「わ、分かりました」

玲奈「これは私の勝手なイメージなんだけど、呪文は一言二言の短い文章。詠唱は呪文より長く、時には詩のようなものもある、って感じでいくから」

作者「呪文って言うと、やっぱリドラ。エとか、ファイナ。ファン。ジーとか、ゲームのイメージね。詠唱になると、やっぱ詩とか短歌みたいなイメージにあるな」

玲奈「まあ、あなたが間違っではないわ。ただ、復活の呪文とかはないけどね」

作者「わーい」

奈々「ところで先生、呪文と詠唱って、今の質問から考えるに違うものなんですか？」

玲奈「いや、厳密に言うと、違いなんてないわよ」

奈々「ないんですかつ！？」

玲奈「さっきのは、あくまでニュアンスの話よ。定義付けする方が、むしろ難しいと思うわ」

奈々「へ……へえー…へえ」

玲奈「この二つも、大まかに分けて二つのタイプが存在するわ。あくまで、私個人の意見だけど」

奈々「なんか、二つに分けるの多いですね」

そのいち、起動キーとしての

玲奈「一つは、前の講義でやった、魔法陣の起動キーとしてね」

奈々「あ、確かに言っていましたね」

玲奈「呪文の方は、起動キーの名前の通り、その一言で魔法陣が完成するタイプ。得てして、それぞれの魔術体系の中では、基本的なもの、初歩的なもの、単純なものなんが多いわ」

奈々「初歩的ですか……。それは確かに、私にも覚えが。護符を使った術なんですけど、必ず『急々如律令』って言いますもん」

玲奈「まあ、それが起動キーって事なんでしょうね。これは、詠唱を起動キーとしている方も同じ。こっちの方は、起動キーの他に、魔法陣のパーツも含まれてるってのが、違いかしらね」

奈々「魔法陣のパーツも、ですか？」

玲奈「そう。普通、詠唱って呼ばれてる長い文章は、大威力の術や、影響範囲の広い術なんが多いわよね。つまり、魔法陣はそれだけ複雑になってるの」

奈々「はい。前にやりましたね。私にはまだ、縁のない世界です」

玲奈「それだけ大きいと、起動キーを抜いただけじゃ、別の術の魔法陣になったり、変に不安定な分暴走したりするわ。行き場を失った魔力が暴発するだけならまだしも、術の失敗は基本的に術者本人に返ってくるから、下手したら死ぬわね」

奈々「し、死ぬん、ですか（怖）」

玲奈「うん。下手したら、水風船みたいに、パーンって」

奈々「そ、そんな話、今はいいじゃないですか。こ、怖いです（ぶるぶる）」

玲奈「だから、別の術になったり、制御不能に陥らないよう、に起動キー以外のパーツも一緒に抜いていくのよ。一番完成させやすい形まで、あえて崩してるってわけ」

奈々「私も、将来使えるようになるでしょうか？（真剣な眼差しで）」

玲奈「むしろ、なれなきゃ鷹司家は滅ぶわ」

奈々「ガクッ（チーーーーーン（お坊さんが叩く、あれの音）」

それに、そのものが術に

玲奈「あのさ、気落ちしてるとこ悪いけど、次行くわよ」

奈々「……………」

作者「奈々ちゃん、帰って来てー」

奈々「……………はっ!？」

作者「お帰り」

玲奈「はい、バカが帰って来たところで、もっと難しいのやるから」

奈々「さっき、あんなひどい事言われてショックなのに、もっと難しいんですか」

玲奈「呪文・詠唱そのもので、術を起動させるタイプよ」

奈々「言葉だけで、術を発動させるって事ですか？」

玲奈「そう。さっきの詠唱を思い出せば分かるけど、魔法陣の役割も全て口頭で行うの。勿論、色々な工夫が凝らされているわ」

奈々「例えば？」

玲奈「分かりやすいので言うと、音楽みたいに、音階やリズムをつけるのかな。あとは、数秘学的に、何文字・何節・何文で文章を区切るかとか。あとは単語の意味を考えて、色々組み合わせたりね」

奈々「数秘学……？」

玲奈「とりあえず、実家帰って勉強して来いバカ」

奈々「ガーーン……」

玲奈「まあ、こんな感じかな。勿論、呪文タイプは単純で威力が小さく、時間があまりかからない。詠唱タイプは複雑で威力が大きく、時間がかかる。この点は、起動キーの場合と一緒よ。ただし、魔法陣を準備する必要がない分、運用性が高いわ。まあ、全てを言葉にする分、魔法陣を用いるものより難易度は少し高いかな。言葉にどれだけ魔力を乗せられるか、つてのも重要だから。まあ、これは起動キーにも言える言葉だけど」

奈々「せ、先生。もう頭が痛いです」

玲奈「安心しな。もう終わったから」

奈々「はふうー」

玲奈「ちなみに、詠唱短縮のテクニクこ、音階・リズム・数秘学・単語の選定は、起動キーたる詠唱にも応用できるから、覚えといてね」

奈々「ひ、はい」

玲奈「それじゃ、これにて終了。よく休んで勉強しなよ」

奈々「……………（机に突っ伏し、辛うじて片手を拳手）」

これはあくまで、作者（蒼崎れい）自身の考えた、自分なりの論理です。この他にも様々な解釈の仕方があります。

五時限目 術式

玲奈「んじゃ、今回は“術式”についてやってくわよ」

奈々・作者「おー！」

玲奈「……………あんたら、やる気あるの？」

奈々「もちろんです！（キリッ）」

作者「いや、正直どうで…………（グサッ）」

奈々「れ、玲奈先生ななにゃにしちゃってるんですきゃ（怖）！
！」

玲奈「所詮文章の中なんだから、刺したって死なないわよ」

奈々「そ、そんな身も蓋もない事を。って、血がいつぱいでてますよ！？」

作者「（ドバドバドバ）」

その巻、例えるならば……

玲奈「術式とは、まあ読んで字の如く、“術”を起動させる“式”
って言ったところね」

奈々「って、完全にスルーですか…………」

玲奈「簡単に言っと、全ての魔術において術式は存在するわ。例外
は…………、たぶんないと思う」

奈々「えつとそれは、あるかないか分かんないやつがあるんですか
？」

玲奈「まあね」

奈々「なんなんです、それ？」

玲奈「最も代表的なのは、精霊魔術よ。本当は、もつと細分化できるんだけど、『地水火風の四大元素を繰る術』って項目でまとめた系統。こいつだけは、分かんないのよね」

奈々「なんでです？」

玲奈「各体系によつて、全然違うのよ。詠唱がいるところもあれば、無詠唱が基本だったり、魔法陣使うのがあったり、呪物フエティッシュを使うのがあったり、もうてんでバラバラ」

奈々「先生は使えるんですか？」

玲奈「私は、無詠唱魔法陣なしの、汎用性の高いのをぱくった」
奈々「ぱ、ぱくったって……」

玲奈「話がだいぶ脱線しちゃったわね。どつかでその内特別講義開いてあげるから、今は忘れなさい」

奈々「はい」

玲奈「えつと、全ての魔術には、術式が存在するってとからだなつと。これは私の解釈になるんだけど、術式って言うのは関数みたいなもんなのよ」

奈々「かんすう？」

玲奈「……… 奈々、あんた入試の時、一般教養のテストも受けたわよね」

奈々「はい。でも私、数学苦手なんですよお。てへ」

玲奈「（スパーン!）」

奈々「ううゝ。叩かないでください、痛いですう」

玲奈「やったでしょ。『 $y = ax + b$ 』ってやつ」

奈々「あ、やりました」

玲奈「ようは、あれと一緒によ。xの値は魔力、 $ax + b$ と言う関数は術式、yの値は魔術。魔力を術式に入力すると、魔術が出力されるの」

奈々「えつと、にゆうりよく？ しゅつりよく？ えつくすと、わいと、えーと、びーと、しーと……」

玲奈「こらこら、cはない」

奈々「はッ！？　そうでした」

玲奈「術の難易度が上がれば、それに比例して術式も難しくなる。同じ系統の術なら、やっぱりベースとなる術式も同じ系統になってくるわ」

奈々「例えば？」

玲奈「そうね。同じ火属性なら、必ずどこかに火を示す文章や記号が入るし、属性が違ってても同じ系統の術なら、ベースになる魔法陣の形は似てくるわ」

奈々「へー」

玲奈「私達、陰陽師が使うのは、だいたい五芒星ね。五行を象徴してるから。まあもつとも、これも流派によっちゃバラバラかもしれないけど」

奈々「確かに、うちも五芒星の他に色々使ってます」

玲奈「まあ、そんなところよ」

その式、必要なもの

玲奈「まあそれこそ、術式の起動に必要なものなんて、個人によるわ」

奈々「あ、それには納得です」

玲奈「珍しいわね、あんたにしてわ」

奈々「ばかにしないでください。それでも、鷹司家の長女です」

玲奈「あ、偶然。私も長女なの。って、んなもんでもいいのよ」

奈々「は、はい……（がっかり）」

玲奈「さっきで術式がどんなもんかは分かったと思うから、次は実際に術式を構築する方法について解説していくわ」

奈々「はい、お願いします！」

玲奈「えっと、一言の呪文も含めた詠唱等の朗読、魔法陣、フェティッシュ呪物、カタトリス触媒。基本的にこの四つにまとめられるわ」

奈々「先生、質問です！」

玲奈「言ってみい」

奈々「私達つて、護符に魔法陣書いて使ってるじゃないですか。この場合、護符つて魔法陣なんですか？フェティッシュ呪物なんですか？」

玲奈「うーん、護符に描かれた場合かあ。魔法陣かなあ。あくまで護符に描かれた陣が、主になるわけだし」

奈々「はあ」

玲奈「それじゃ、続きね。呪文詠唱と魔法陣は前の講義でしたから、フェティッシュカタトリス説明は呪物と触媒に限定するわね」

奈々「お願いします」

玲奈「まずは、フェティッシュ呪物の説明から。これは術式の起動に際して、“物理的に必要な物”よ」

奈々「物理的つと言うと、“物”ですか？」

玲奈「そうね。簡単な例を上げれば、呪殺なんかわかりやすいわ。でも、呪殺は国際的に禁止されてるから、使っちゃダメよ」

奈々「使いませんよ、そんな怖いの」

玲奈「話を元に戻すけど、呪殺には呪いたい相手の“身体の一部”や“名前”なんかが必要になってくるわ。この場合、名前を書いた

紙——そうねえ、お札とかに書くかな。フェティッシュ名前の書いたお札や、身体の一部、髪の毛や爪、血液、皮膚なんかが、呪物になるわ。一番わ

かりやすいのだと、“呪いの藁人形”とか。あれは人形に呪いたい相手の髪の毛入れたり、フェティッシュ写真を貼り付けたりして、五寸釘で打ちつ

けるけど、髪の毛や写真が呪物になるわ」

奈々「なんか、呪物つて、案外普通の物なんですわ」

玲奈「そうね。魔具を用いるのもあるわ。ただ、フェティッシュ呪物は基本、使い捨てのものが多くから、魔具を用いるのは少ないわね」

奈々「使い捨てなら、なおさらでしょうね」

玲奈「んじゃ次、触媒の説明入るわよ」
カタトリス

奈々「はい、どうぞ」
カタトリス

玲奈「つつても、触媒の意味は、化学の実験で使う触媒と同じ意味よ。ようは、術式をより早く、より少ない魔力で起動できるようにするのが触媒よ」
カタトリス

奈々「それじゃ、ぶつちやけ触媒ってなくても大丈夫って事ですか？」
カタトリス

玲奈「へええ、奈々にしては珍しく良い質問ね。そうよ、極言すれば、触媒は絶対に必要なものでもない。最悪の場合、なくても術式は起動できるわ。理論上、はね」
カタトリス

奈々「理論上は、ですか？」

玲奈「そう。私達の使ってるのは、戦闘行為に特化された魔術。戦う事を目的に形作られた技術体系なの。つまり、意志に応じて即座に術式を起動できる。長期戦が可能なように、また極限状態でも術式が起動できるように、できるだけ少ない魔力で戦う事を求められるわ」

奈々「まあ、確かに。退魔のお仕事で収入得てるんですから、戦闘は切手も切り離せませんよね。私はあまり好きじゃないんですけど」
玲奈「だから、殊戦闘行為を目的とした魔術体系では、触媒の発展こそが勝敗を左右すると言っても過言じゃないわ。私の持つてるし妖刀、錫杖や枯杵、護符。これらも広義の意味では、触媒になり得るわ」
カタトリス

奈々「なんか、すごく複雑ですね。って事は、護符は魔法陣と触媒の役割を両方とも持つてるって事なんですか？」
カタトリス

玲奈「そうね。魔法陣を描くのは、護符じゃなくても別に構わないわ。護符に描くのが最も効率的だから、今の形になってるの」

奈々「なるほど。奥が深いんですね。術式って」

玲奈「例え流派が同じでも、同じ術式は存在しないわ。個人によって、それらは千差万別に変化するわけだからね。じゃ、今日の講義はここまで」

奈々「ありがとうございます」

あくまで、作者個人の解釈ですので、あしからず。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0691s/>

教えて、玲奈せんせい！

2011年11月10日23時20分発行